6 防除対策推進上の問題点及びその対策

0 的陈刈床 農作物名	病害虫名	選点及びての対象 問題点	対策
普通期水稲	トビイロウンカ	・箱処理剤による防除が基本であるが本 ・	対象 ・的確な発生状況の把握と必要に応
自應知小個	רבין נוסטא	田防除が必要以上に省かれ、坪枯れを 生じる場合がある。 ・イミダクロプリド剤に対し感受性が低下	じた防除
		した個体群が飛来した。 ・圃場間や圃場内でも発生密度差が大き〈株元に寄生するため、生息密度の把握に労力を要する。	
水稲	斑点米カメム シ類	・既存の薬剤では残効性が短く、発生量が多い圃場では3回以上の防除が必要になることもあるが、防除コストや労力面で実施が難しい。 ・薬剤散布においてポジティブリスト制度に対応したドリフト対策に苦慮した。	・残効期間の長い薬剤及び効果の高い粒剤の登録促進
	縞葉枯病とヒ メトビウンカ	・本年は特に問題となった点はなかったが、近年の縞葉枯病の発生は越冬個体群の保毒虫率の高低に関わらず、7月以降急激に増加する場合が多い。	・越冬個体群の保毒虫率だけでなく、 飛来虫の保毒虫率の調査とその結 果に応じた防除対策の実施。
麦類	赤かび病	・防除徹底のため出穂期以降の2回防除を推奨しているが、特に粉剤は出穂期以降に使用できる効果の高い薬剤が少なく、対応が困難であった。	・粉剤による防除では使用できる薬剤が少な〈、多発条件下での複数回防除は困難であるため、効果の高い薬剤の早期登録が望まれる。
果樹	カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤア オカメムシ)	・近年、多発生する間隔が短くなっている。 (近年での多発年 H8,H14,H16,H18) ・7月の多発生時には、飛来初期の防除 が遅れ、その後、効果が高い薬剤を散 布しても、被害を抑えることができない園 が多く見られた。 ・7月下旬の口針鞘数調査からヒノキき ゅう果からの離脱時期は9月上旬頃、ま た、ヒノキきゅう果の着生状況調査の結 果から発生量は平年並と予測していた が、実際はほとんど発生が見られなかっ た。	・薬剤散布だけに頼らない効果的な 防除技術の確立 ・より的確な予察技術の確立
なし	クワゴマダラヒトリ 黒星病	・かんきつ以外で登録薬剤がない。 ・重要な防除時期である幼果期に降雨 が続き、適期防除が行えなかった。	・発生予察調査方法の確立・発生初期及び収穫後、休眠期の防除の徹底・罹病した落葉の園外への持ち出し
イチゴ	炭疽病	・春季からの親株の発病 ・苗がランナーにつながっている間、炭 疽病以外の原因(輪斑病等)でランナー に黒い病斑ができるため本病との見分 けがつかず、発病株の除去が徹底でき ない。 ・降雨が続いた時期に、薬剤防除が徹底 できなかった。	・無病親株の確保 ・育苗初期における病斑(ランナ・) の見分け方の確立 ・雨よけ育苗施設の普及
	ハタ゛二類	・栽培様式や品種の違いによる害虫の発生に差異が見られ、高設栽培や「さちのか」の普及に伴い、ハダニが多発しやすい状況にある。 ・有用昆虫に影響が少なく、かつ有効な薬剤が限られている。 ・天敵利用技術の導入も進んでいるが、防除効果に個人差がある。	・発生初期の防除徹底 ・天敵放飼前の薬剤による徹底防除 の実施とその後の確実な天敵のスケ ジュール散布

農作物名	病害虫名	問題点	対策
トマト、ミニト	黄化葉巻病	・トマト生産者の防除対策の認識は向上	・地域一体となった防除対策の徹底
マト		してきているものの、異なる栽培様式の	・コナジラミ類に効果の高い薬剤の登録
		混在(有機栽培、夏秋とり)や、家庭菜園	促進
		により、栽培地域のウイルス濃度を低下	・各種防除資材(UVカットフィルム、ミ
		させる取り組みが困難。	ラーマルチ等)を組み合わせた防除
		・媒介虫、特にタバココナジラミバイオタ	体系の普及
		イプQに効果の高い薬剤が少ない。	・目合いの細かいネットで被覆した場
			合の栽培技術確立(特に下温対策)
			・耐病性品種の特性の解明
トマト、ミニト	タバココナジ	·タイプQの薬剤感受性、生態等に関し	·タイプQの薬剤感受性などの特性
マト、アスパ	ラミ(バイオタ	て不明な点があり、十分な防除対策がと	の解明
ラガス	イプQ)	れない。	・各作物における薬剤防除、耕種的
		・これまで発生の少なかったアスパラガ	防除、物理的防除を組み合わせた総
		スで多発生し、登録がある有効な薬剤が	合的な防除対策の確立
		少ない。	